

流水科学センター

—アムール川からの手紙—

亀谷 隆



「石器」
石を打ち欠いて作られた狩猟用の槍先や漁労用の鈎先などあり、サハリンや北海道からも類似した石器が出土する。
版画・谷口二郎（札幌）

★オホーツクの海

昭和54年（1979）、紋別市が開基百年記念事業の一環として流水科学館構想を、北海道大学低温科学研究所附属流水研究施設と協議して立案した。

立案された科学館構想は市の政策審議委員会で設置などについて審議されていたが、2年後の昭和56年には網走支庁管内オホーツク地域問題研究会が観光レジャーの振興のための方策として、紋別市に『流水文化センターの整備構想』を提案した。

提案を受けた紋別市は、翌昭和57年に基本計画の作成に着手した。流水に関わる施設の建設については、遠紋地区広域市町村振興協議会も希望し、同協議会のまとめた『地域経済活性化計画』では、オホーツク流水科学センターを中心とした北方文化村を整備すべきとしている。

紋別市の構想は、北海道、北海道教育庁、財団

法人北海道埋蔵文化財センターの3機関による科学文化施設等調査検討会の検討対象となった。

昭和60年（1985）の検討会報告書には、「同センターは、社会教育施設の博物館ととらえるよりも紋別市等関係地域のシンボリック的役割を果たしている流水という有力な観光資源を機軸として、漁業その他の産業の振興や当該地域住民の生活文化の向上に資することを目的とした広域的な総合センター的施設として整備することがふさわしいとも考えられる」と述べられている。

★本格的な建設を目指す

翌昭和61年、紋別市は『流水都市拠点地域整備構想』を作成したが、そのなかでは「北海道では、昭和61年に科学技術庁の『アクアマリン計画』の指定を受け、これを推進するためオホーツク海を対象に恒久的な海洋観測と氷海科学研究の総合システムを開発整備し、（中略）さらに、北海道においても『オホーツク流水科学センター』（仮称）の実現へ向けて調査が行われ、昭和65年開館を目指し、昭和63年度実施設計を行うものとしている。」と述べている。

北海道大学、北海道、紋別市の代表によって実施設計の原案が作成されることになり、筆者は検討委員として参画することになった。

委員会で話題となったものの一つに、全展周大型映像を採用するか否かの検討があった。全展周映像は、直径20m前後の半円球天井をスクリーンとして映像を投影する展示機器で、原理はプラネタリウムと同じである。

この全展周映像を採用するには、ドーム形状の建物と特殊映写機器を設備し、投影する映像フィルムの製作も必要となることから、費用は億円単位となる。

北海道としては維持経費などを考慮し、積極的には賛成できないという思いがあったが、紋別市は流水のダイナミックさを伝えられる手段として採用に積極的な賛成意見が多数であったことから、結果として実施することになった。

★流水を追って

360度の半円球スクリーンに投影するフィルムは幅70mmで、1画面の面積は35mmフィルムの4倍で、撮影するカメラも特殊である。

一般的な映画用の35mmカメラは、レンズの上下にフィルムを収納し、上から下へ移動させて撮影するが、全周の70mmカメラは、レンズの左右にフィルムを収納し、左から右に移動させて撮影する。

その理由は、人の目の習性として、動きを分解したコマを連続して見るとき、縦のブレは敏感に察知し、横のブレは縦より鈍感であるといわれており、画面が大型になればブレ現象が顕著に映るからである。

撮影は、厳寒期の紋別沖を撮影拠点として行われた。なかでも流水の雄大さを伝えるには、飛行機からの空中撮影が最適であることから、国内に2機しかない特殊改造したヘリコプターを女満別空港に駐機させ、流水接岸を待つことにした。

しかし、撮影を予定した年は、例年より流水接岸が遅く、おまけに小型で量が少なく、期待した画像を得ることができなかったことから、翌年の接岸を待つことにした。

迫力ある流水が接岸してほしいのは、関係者にとっては気が気でないことで、工事監督として翌年の正月には神社参りして願掛けをした。

この年の撮影で、オホーツクの海上がどのぐらい寒いかが判明した。その様子を当時のカメラマンは、「翌日、空撮の為、カメラをヘリコプターに取り付けて飛ばすが、スイッチを入れても作動しない。このモーターは寒冷地仕様になっていなかったのだ。真冬のオホーツク海上空は、マイナス30度を超えるのである。思案した挙げ句薬局でベンジンカイロ30個買って、カメラとブリックの間に放り込む。カメラはやっと動いてくれた」と回想している。

迫力ある映像を撮影してほしいということで、カメラマンには過酷な要求をした。その一つとして、オホーツクの海面ストレスに飛行しつつ、断崖絶壁の滝に向かって飛び、衝突寸前に左上昇して撮影するようにと要望した。カメラマンと操縦士とが事前に検討し、「難しいが、何とかやってみましょう」とのことで撮影が始まったが、しばらくは連絡がなく心配していたら、飛行途中に無線で「無事、撮影終了!」との連絡があり、ひと安心した。

後日談であるが、海上ストレスの飛行は航空法では特別な理由がなければ禁止されていることから、事前に航空管制官と協議し、合法的な飛行扱いで飛行したという。

このような難題は他にも起きたが、予定より3年遅れての撮影が終了し、音響は当初、著名な作曲家によるオーケストラで編集することにしていたが、諸々の事情からシンセサイザーと効果音とに変更した。

紋別市での試写会では、あまりの迫力の映像のせいか、「船酔いに似た感じを受けるので、心臓病などの人には警告をする必要がある」などの意見が出され、会場入口にその旨を表記することにした。

★流水のふるさと

北海道に接岸する流水は、これまでロシア沿海州のアムール川の流水が凍ったものと言われてきたが、近年の調査では、オホーツク海北方のマガダン沿岸地帯で凍った氷が大半であることが判明した。

アムール川は中国名では黒竜江、モンゴル名はハラムレンと呼ばれ、中国、モンゴル、ロシアの三国産といえそうで、昨年、アムール川とウスリー川の合流点に位置するハバロフスクの街を訪ね、悠々と流れるアムール川を目にすることができた。

案内をしてくれたロシア国営ラジオ放送局ハバロフスク支局のアナウンサー・岡田和也氏によれば、アムール川は長さ4,400kmで、支流は200カ所を数え、5月～11月の間は船の航行が可能であるという。

そして今年、またアムール川を見ながら、川水が海へ流れ、その水が凍って北海道へという流水の旅へのロマンを捨てがたい思いがした。



profile

亀谷 隆 かめや たかし

1943年函館市に生まれる。武蔵野美術大学卒業。公立中学校教諭、市立函館博物館、北海道開拓記念館に勤務し2006年退職。北海道大学、北海道東海大学講師を歴任。現在、北海学園大学講師（博物館学）、特定非営利活動法人公共環境研究機構理事長、北海道博物館協会会員、北海道北方博物館交流協会評議員、地域文化開発研究会主宰など。

谷口 二郎 たにぐち じろう

1932年富良野市に生まれる。北海道大学文学部卒業。北海道庁に勤務し1990年退職。約30年にわたり北海道の自然や生活道具などをモチーフとした版画制作の活動を続けている